

# 撰集資料としての『勝間の若菜』

——『類題玉石集』『類題和歌鴨川集』との関係

小野美典

## 一 はじめに

キーワード・類題集・弘正方・鈴木高朝・長澤伴雄・周防国三田尻  
近世後期から幕末・維新期にかけての和歌史を考えたとき、類題集（類題和歌集）の盛行は一つのエポックとも言えよう。

類題集は、本来、歌合・屏風歌等の流行で題詠が盛んになってきた平安時代に、歌題に対する古歌・証歌を挙げ、その詠作手引きとして編集されたものであった。『古今和歌六帖』を現存最古の類題集として、以後、江戸時代末まで、さらには明治に入ってからも多く編集されている。

しかし、近世後期に入ると、これら古歌の秀歌撰的要素の著しく減じた、新たな類題集が現れる。同時代歌人詠を中心とした類題集で、加納諸平編『類題鯁玉集』初編（文政十一年（一八二八））にその典型を見ることができるといえる。本書はその後、七編まで刊行され、二編（天保四年（一八三三）刊）発兌一年後には、初編・二編合わせての『鯁玉集作者姓名録』が上板された。この作者姓名録の刊行は画期的である。姓名録により、歌人たちは同時代を生きる全国の

歌人の姓名を知ることができ、「詠歌・人名・居住地」がセットとなって記憶に留められる。

既に名の知られた有力歌人たちは、自らの歌を全国不特定の人々に発信する機会を持った。詠作にも力が入り、一定水準の秀歌を詠み続ける必要も出て来よう。一方、無名歌人や初心者も類題集に入集することで、歌人たちの座の末席に加わることができるようになる。修業研鑽次第ではさらに名を馳せることも可能で、地方の「名士」が、全国区の「歌人」という肩書を手に入れる機会もあり得たのである。明治以降、新聞・雑誌を媒体として全国各地に歌人結社ができたが、その先鞭ともいえる現象である。

右の『類題鯁玉集』と並んで、近世後期の注目すべき類題集に、長澤伴雄編『類題和歌鴨川集』（以下『鴨川集』と略）がある。伴雄は諸平と同じく本居大平門で、両者は親しかったが、後には疎遠（反目・絶縁とも）な関係となった<sup>注1</sup>。諸平の心身不調で『類題鯁玉集』六編が上板できずにいる間に、長澤は『鴨川集』初編（大郎集）を刊行。これには作者姓名録が巻末に付され、かつ、書肆による詞「鴨川集は二編三編とつきく」に二冊つゝ、すり巻として世に出し給はんの下かまへにおはすればそれに加入したまはんとお

もほす諸君子たち御詠草に御俗名実名はさらなり国所をも委く記しつけ給ひてかたく封して先生家へさしつけておくり給ひてよ〔後略〕<sup>〔注2〕</sup>が付されている。二編・三編と嗣出予定なので、自作の歌に俗名・実名と住所を詳しく記して編者長澤の家に送って欲しいというのである。右の引用の後略部分には、京・大坂・和歌山の書林を挙げて、そこでも歌の中継ぎ仲介が可能な旨を記す。作者姓名録の重要性、詠歌募集の意義を長澤が熟知していたとともに、類題集の制作に書肆の側が積極的に動いていたことがわかる。

そして近世後期には、先行する類題集に倣った様々な類題集の編纂が企図され、一部は実際に上板されていく。

既に先学によってしばしば引用されてきた「大藤高雅（藤井高尚の養孫）宛萩原広道書簡」では、類題集の出版計画が各地で各人様々に進んでいる歌壇の情勢を「永祿天正の戦国のさまに御坐候」<sup>〔注3〕</sup>と記し、別書簡では、「鴨川集三篇玉石集二篇翁山集（原註「備後上下人重森良谷頼野生と伴雄二人に撰くれと申出也」）水門集（原註「長門藩在京弘正方集」）など、申様のものへ歌を入候様之人御坐候は、追々御出させ可被下候。頼まれ候てこまり入居申候」<sup>〔注4〕</sup>と伝えている（傍線は小野。以下同断）。「鴨川集三篇」「玉石集二篇」「翁山集」「水門集」などの類題集への詠歌の提供依頼を受けて、広道が困惑している、心中を吐露している。広道をして困惑せしめるほど、全国各地で類題集編纂が企画され有力歌人に料歌提供の依頼が舞い込んでいたのである。

一重傍線の重森良谷（備後国）が計画した『翁山集』に関しては、山崎勝昭の詳細な検討<sup>〔注5〕</sup>がある。書簡に名は挙がついていないが、長門国では、豊浦郡西市在と思しき長井芳風（長春）なる人物

が、『類題同調集』の催し文を近藤芳樹に書いてもらっている<sup>〔注6〕</sup>。先に見た書簡で広道が「戦国のさま」と表現した、類題集編集競争（狂騒）は、地方の旦那芸程度の和歌技量と思しき富裕層の参画にまで至ったのである。

さて、前掲書簡では、二重傍線の長州藩士の弘正方も『水門集』の編集を企図していた。大坂の萩原広道にまで料歌提供の依頼があったことに鑑みて、全国規模（全国各地の歌人詠）での類題集編集を計画したものと思われるが、完成に至らなかつたようである。しかし、この正方が編集した、一地域の同時代歌人詠に限定した類題集が現存する。『勝間の若菜』である。その詳細は旧稿<sup>〔注7〕</sup>に纏めだが、同集内の歌人の概要と略歴については別稿<sup>〔注8〕</sup>も予定している。

詳細は旧稿と別稿に譲るが、編者と歌集の概要を述べる。

弘正方<sup>ひろまさかた</sup>は文化七年（一八一〇）に生まれ、長州藩の在郷藩士として三田尻<sup>むつしり</sup>の向島に住んだ。藩の江戸葛飾抱屋敷や京都での勤番が長く、万延元年（一八六〇）七月に京都で没した。その著作には、版本『周防府 松崎天神鎮座考』（嘉永二年刊、十月頃に上梓か）ほか、家集『板屋集』（天保十四年八月自序）などがある。当時の類題集『鴨川集』『類題千船集』ほかに詠歌が採られ、自身も類題集『勝間の若菜』を編集し、『水門集』（詳細は不明）を企図した。

『勝間の若菜』は、周防国三田尻の当代歌人詠を中心に来訪者の歌も加えて類題集としたものである。四季・恋・雑に部類され、三十五名の歌人（うち一名は読み人知らず）の歌計二百

二首を収める。弘化三年（一八四六）正月の正方自序の日付頃に完成したと思し、序と正方自詠の巻軸歌とを合わせて考えると、続編を計画していたようだが、それらは現存していない。

さて、注7の旧稿で指摘したが、『勝間の若菜』（以下『勝間』と略）の入集歌数上位の歌人（主要歌人）は、そのほとんどが鈴木高輅編『類題玉石集』（以下『玉石集』と略）への入集歌人である点が目目される。しかも、歌人が共通するだけでなく、一部の歌は『勝間』と『玉石集』で共通している。つまり、一方がもう一方の歌集の、直接的ないしは間接的撰集資料となった可能性が高いのである。

先に、広道が「戦国のさま」と述べた書簡を見たが、類題集編集競争（狂騒）の世に在って、その料歌が事欠くであろうことは想像に難くない。その問題に編者たちが、どう対応したのか。

幸いに、鈴木高輅、長澤伴雄、萩原広道らにかかわるところでは、その書簡類や周辺資料が多数紹介されており、それらを精査・検討して様々な角度からの研究成果が発表されている。稿者はそれらの成果に依拠しつつ、歌集の中の歌そのものに注目することによって、書簡類から得た先学の知見を検証することを、本稿で試みたい。

先を急ぐならば、『勝間』歌は『玉石集』にも『鴨川集』にも採られている。しかし、その採られ方には『玉石集』『鴨川集』で差がみられる。三つの類題集の中の歌を比較検討することによって、その差異を具体的に検証し、それが三作品の特徴としてどのような

意味合いを持つのかを検討し、先学の蓄積した知見と照らし合わせるのが本稿の目的である。

## 二 『玉石集』と『鴨川集』

『玉石集』と『鴨川集』について、本稿とかわる事項を簡略にしておく。

『玉石集』（上下二巻二冊）は、鈴木高輅編の類題集。兼清正徳<sup>（註1）</sup>、山崎勝昭<sup>（註2）</sup>、亀井森<sup>（註3）</sup>、吉良史明<sup>（註4）</sup>らの研究がある。版本の刊記に依れば、嘉永四年（一八五二）十月発兌（実際は翌年の刊行か）、「二編近刻」とするが二編は上梓されなかった。歌数は、全三二八一首。注9の兼清<sup>①</sup>の21集「あとがき」に、「全作者七五三人中で生国あるいは居所分明の作者五三三人中の一三七人（二六・二％）を防長歌人が占め」とされる。弘化五年（一八四八）三月の静間三積序、同年九月中島広足序、嘉永二年（一八四九）春の市川音澄跋を持つことなどから、『玉石集』編纂は相当早くから企図され、上板までにかかりの時間を要したことがわかる。

鈴木高輅は、周防国三田尻の松崎神社（松崎天満宮とも。現在の防府天満宮）の神職。文化九年（一八一二）生まれ、万延元年（一八六〇）四月四日没、享年四十九歳。鈴木家は松崎神社の社家で、父の直道（直通）も国典・語学・和歌に秀でていた。高輅は、父や足代弘訓らに学び、『防府天満宮靈験記』（弘化四年（一八四七）五月序、版本）の著作のほか、『類題玉石集』、『防府現存 佐波のあら玉 三十六歌仙』（安政四年（一八五七）八月刊）などの歌集を編集した。

『鴨川集』については、注2のクレス出版の影印の解説(中澤伸弘・宮崎和廣)が加納諸平・長澤伴雄の略伝を記載してわかりやすい。山本嘉将の研究(注15)で伴雄のことが詳述され(注16)、他に、亀井森(注17)などの研究がある。注5の山崎勝昭『萩原広道 上/下』も有益である。

『鴨川集』は、諸平編『類題鯁玉集』に対抗して編まれた。初編(太郎集)(嘉永元年(一八四八))以下、五郎集(同七年(一八五四))まで、五編十冊刊行。前章で述べたように、全国規模での歌の募集を行い、姓名録も備えて、門流に拘泥しない歌人の掲載を行った点は注目される。また「類題和歌鴨川集附録」として『詠史歌集』も刊行。『詠史歌集』初編は嘉永五年(一八五二)十一月長澤伴雄自序、同六年刊。二編は大正二年(一八二三)四月に伴雄の息子息六郎に依る刊行だが、安政二年(一八五五)には伴雄の手で成稿を見ていた(注16)。

長澤伴雄は、紀州藩士吉岡義知の次男として文化五年(一八〇八)十一月に生まれ、後に長澤政寛の養子となった。本居春庭・本居大平・伴信友らに就いて国学・和歌を学び、京に出て有職故実も修めた。藩のために書籍・絵画の書写・模写事業に関わった点も注目される。徳川治宝に重用されたが、その没後、嘉永六年(一八五三)に藩内の政争から役を解かれ、かてて加えて「揚座敷入」(人卒)となり、安政六年十一月二十七日獄中で自刃。号は柿園、絡石舎など。

以下、各歌集内の歌を掲出して検討するが、混乱をきたさないように、和歌末の「」に『勝間』『玉石集』『鴨川集』各々を勝・玉・鴨の印で区別して表示する。『鴨川集』は、太郎集から五郎集まで

をそれぞれⒶ・Ⓑ・Ⓒ・Ⓓ・Ⓔ、付録の『詠史歌集』初編・二編を史①・史②と略記した(注17)。

### 三 『勝間』と『玉石集』『鴨川集』の共通歌人と重複歌

本章では、『勝間』歌人の中で、『玉石集』ないしは『鴨川集』に歌が入集している歌人(以下「共通歌人」と呼ぶ)を概観する。

考察に入る前に、三つの類題集の成立の概要を編年形式で掲出する。元号年の下の( )内は西暦の下二桁である。

弘化三年(四六) 正月―『勝間』弘正方自序日付(成立か)

五年(四八) 三月―『玉石集』静間三積序の日付

嘉永元年(四八) 四月―『鴨川集』Ⓐ植松雅恭序の日付(刊行か)

元年(四八) 九月―『玉石集』中島広足序の日付

二年(四九) 春―『玉石集』市川音澄跋の日付

三年(五〇) 二月―『鴨川集』Ⓑ賀茂直兄序の日付(刊行か)

四年(五二) 十月―『玉石集』刊記の日付(実際は翌年刊行か)

四年(五二) 十一月―『鴨川集』Ⓒ刊記の日付

五年(五二) 十二月―『鴨川集』Ⓓ長澤伴雄跋の日付(刊行か)

六年(五三) ―『詠史歌集』史①刊記の日付(嘉永五年十一月長澤伴雄自跋あり)

七年(五四) 一月―『鴨川集』Ⓔ桂有影序の日付(刊行か)

安政二年(五五) ―『詠史歌集』史②成稿(注16参照)

『勝間』が三作品の中では最も早くに成立した。『玉石集』は、静

【表A】『勝間』入集歌人の『玉石集』『鴨川集』入集状況

注：左端の数字は便宜的に付した歌人番号。歌集欄の算用数字は入集歌数。  
—は当該歌人の入集なし。

ノ	氏名	勝間	玉石集	鴨川集	㊶	㊷	㊸	㊹	㊺	史㊻	史㊼
1	弘正方	24	21	19	0	6	5	3	0	5	0
2	今津維亮	18	15	3	0	0	2	1	0	0	0
3	鈴木高靱	15	45	87	0	19	23	18	14	2	11
4	五十君夷守	14	11	35	0	8	3	5	7	6	6
5	井上直道	13	—	1	0	0	0	1	0	0	0
6	尾古重伴	11	29	12	0	0	8	3	0	1	0
7	荒瀬真纏	7	2	—							
8	荒瀬安船	7	4	—							
9	岩田直言	7	1	1	0	0	0	1	0	0	0
10	村田景周	7	2	1	0	0	0	1	0	0	0
11	吉武春峯	7	3	—							
12	柏木和枝	6	2	—							
13	小泉時子	6	—	—							
14	粟屋正直	5	—	—							
15	小倉種信	5	3	—							
16	木村延年	5	—	—							
17	熊野之光	5	2	—							
18	鈴木直道	5	32	2	0	1	1	0	0	0	0
19	安春駒雄	5	—	—							
20	上田豊足	4	—	—							
21	杉山澄淵	4	—	—							
22	河村勝敬	3	—	—							
23	宗内知道	3	—	—							
24	伊藤忠善	2	—	—							
25	権代貞武	2	1	—							
26	僧凌空	2	2	—							
27	吉武信知	2	—	—							
28	石川西山	1	—	—							
29	井上直道本生母	1	—	—							
30	権代直道	1	—	—							
31	僧仁諦母	1	—	—							
32	僧公壽母	1	—	—							
33	高井任風	1	—	—							
34	弘東太郎母	1	—	—							

間三積の序から三年後、実質的には四年後に刊行の運びとなつてい  
る。計画から刊行までに相当な時間を要したことは、先学にも指摘  
と考究があり、この問題は次章で検討したい。『鴨川集』（詠史歌  
集）も含めて）の刊記（奥付）の年月は、その有無がまちまちで、  
序跋の日付を手掛かりに一応の上板の目安とした<sup>（注8）</sup>。  
さて、次掲の【表A】が、『勝間』歌人の『玉石集』『鴨川集』へ

の入集状況を纏めたものである。  
一瞥して言えることは、第一に、『勝間』歌人計三十四名（詠み  
人知らず一名は除く）のうち、『玉石集』歌人であるものが半数近  
くの十六名に及ぶということ。特に、『勝間』入集歌数の上位者が、  
そのまま『玉石集』入集者となつているのは興味深い。18鈴木直道  
がやや不自然であるが、注8の別稿でも述べたように、直道は高靱  
の父であり、当時の三田尻の歌人  
たちを指導する立場にいた者で  
ある。弘正方より二十二歳も年長  
で、直道を『勝間』の中心歌人に  
据えることは憚られたのであろう  
（しかし、高靱は自身の『玉石集』  
に父の詠を三十二首入れた）。

第二に、『勝間』歌人がかつ『鴨  
川集』歌人でもある者は、5井上  
直道を除いて全て『玉石集』歌人  
であるということ。逆に言うくと、  
『鴨川集』歌人でありながら、『玉  
石集』歌人でなく『勝間』歌人だ  
けであるものは、5井上直道一人  
ということになる。例外的なこの  
事例については、五章で触れた  
い。  
第三に、『鴨川集』への入集の  
問題。太郎集入集者は皆無。1弘

正方、18鈴木直道・3鈴木高輅親子、4五十君夷守が、次郎集から入集。この四人は高輅と伴雄の昵懇さからの入集と考えられるが、正方は独自に伴雄とのルートを持つていたようでもある（五章で考察）。2今津維亮が三郎集・四郎集に計三首、残りの5井上直道、9岩田直言、10村田景周はとも四郎集に一首のみの入集である。

これら三郎集・四郎集への少数入集歌人の歌のいくつかは、恐らく、高輅と伴雄の歌の融通による入集と思われる。既に注5の山崎勝昭ほか先学による考察があるが、『鴨川集』次郎集の奥付に続いて「伴雄又記」が記される（当該部分を持たない版もある）。

此集の稿なりたるころ周防国宮市人鈴木高輅せをそこしてかしくにも玉石集といふ歌巻なり出んとすなるをいかに歌あまたおくりてよといひおこせければおのかのほもとよりにてをしへ子またをちこちのたまあひの詠草ともこの集にえりあまれるをもそへてやかてつかはしぬ（後略）

次郎集完成間近の嘉永三年（一八五〇）頃に、高輅から『玉石集』への料歌送付の依頼があり、伴雄自身や門弟、気心の知れた友人らの詠草に、次郎集の選び残りを添えて遣わしたという。しかし、同二年春の『玉石集』市川音澄跋には、

さるは此集の二編の料の歌を長沢氏へこひにつかはされたるに、鴨川集にひろひあまれる歌ともをもことごとくそへておこせられ、また此集にえり残れるをはかの集のつき／＼の料におこせよとあるまゝに、やかてこなたよりもおくられたる也けり

とある。先の「伴雄又記」に言う通り、伴雄が『玉石集』二編用の料歌を高輅に送ったことが判るが、実は『玉石集』（初編）の選び残りを『鴨川集』の次々の集の撰歌資料として送られてもいるの

である（傍線部）。つまり、高輅・伴雄間で歌の融通が行われていた。時系列から考えれば、高輅の送った料歌は『鴨川集』の三郎集・四郎集あたりで使えそうである。これに関して、山崎勝昭は「そうすると、『鴨川集』にも『玉石集』の「えり残れる」ものが入っているはず。『太郎集』は勿論、「次郎集」も時期的に無理なので、見えるとすれば『三郎集』からだろう。事実、『次郎集』には周防・長門作者は併せて9名しかいなかったが、『三郎集』には併せて40名近い作者が見えている」<sup>(註6)</sup>と述べる。稿者も、この見解に賛成であるが、さらに加えて、この高輅から伴雄に送られた料歌資料の中に、『勝間』が入っていたのではないか、歌集としてではないかもしれないが、少なくとも『勝間』歌がまとまって送付された可能性が高いのではないかと考える。

そのあたりを、重複歌の実態を見ることで明らかにしたい。

#### 四 『勝間』と『玉石集』の重複歌の考察

まず、「重複歌」を定義しておく。二つの歌集に重複して掲載されている歌のことだが、それらの歌は「字句の完全な一致とまでは言えないものの、原歌からの推敲・改訂を経て掲載されたと思しき歌」を広く「重複歌」と考えて考察を進める。ここでは、さらに厳密を期すために、平仮名表記にした時に三十一音が完全に一致する歌を「同一歌」と呼ぶことにする（書写上の濁音符の有無や「む・ん」表記は無視）。「同一歌」と「それ相応の」異なるある歌」とを合わせたものが「重複歌」ということになる。

さて、『勝間』と『玉石集』の歌人別入集歌数と重複歌数は、次

掲の【表B】の通りである。

この【表B】は、前掲【表A】の『勝間』歌人全三十四名のうち、『玉石集』にも歌の採られている歌人十六名の入集状況である。

注目すべきは、両歌集間で計三十三首の重複歌があること。『勝間』入集歌（二百二首）の約十パーセントが『玉石集』と重複していることになる。

○三番歌の存在である。

弘正方ちかきわたりの人々の歌を集めて勝間の若菜といふ歌集をえらひけるををしへ子どものをもひとつにつかはすとて  
（鈴木）高輅

〔玉下維七〇三〕

この詞書と歌は、弘正方が『勝間』編纂を企図していた情報（二重傍線部）とともに、高輅が歌人グループを形成して門弟を持ち、その詠歌を『勝間』撰集資料として提供していたこと（二重傍線部）を我々に教えてくれる。歌中では、無名・初心の弟子の歌であつても選に漏らさないうで欲しい（波線部）と述べる。

従つて、『勝間』『玉石集』の重複歌の中には、高輅が正方に遣わした、弟子（ないしは高輅周辺歌人）詠が含まれている可能性がある。高輅が正方に送るとともに、自身の『玉石集』に入集させたのである。二章で見た長澤伴雄と高輅の『鴨川集』『玉石集』の料歌融通によく似ている。

では、高輅と正方の間の歌の融通はどうだったのか。両者で交わされた書簡等の資料が現存しないので、各歌を検討することでその実態に迫つてみたい。

【表B】の「異なるある歌の数」と「同一歌数」を比べて興味深いのは、前者の方が比率としては高いということである。そして、その歌については、一人の歌人の詠んだ歌の一部に字句の異同があるわけだから、どちらかが先に詠まれた形で、それが（本人または

【表B】『勝間』と『玉石集』の歌人別入集歌数

注：「異同のある歌」は一部に語句の異同があるが同じ歌と見なし得る歌。

	氏名	『勝間』歌数	『玉石集』歌数	重複歌数	異同のある歌の数	同一歌数
1	弘正方	24	21	2		2
2	今津維亮	18	15	2	2	
3	鈴木高輅	15	45	2	2	
4	五十君夷守	14	11	4	3	1
6	尾古重伴	11	29	6	3	3
7	荒瀬真纏	7	2	1	1	
8	荒瀬安船	7	4	3	3	
9	岩田直言	7	1	1		1
10	村田景周	7	2	1		1
11	吉武春峯	7	3	1		1
12	柏木和枝	6	2	1	1	
14	小倉種信	5	3	2	1	1
17	熊野之光	5	2	1		1
18	鈴木直道	5	32	4	1	3
25	権代貞武	2	1	1		1
26	僧凌空	2	2	1	1	
	計	142	175	33	18	15

成立年次  
は、『勝間』よりも『玉石集』が五年後なので、「『勝間』↓『玉石集』」という撰集資料の情報伝達を考えやすいが、なかなか難しい問題がある。

既に、旧稿でも紹介した『玉石集』下巻七

誰かによって）推敲・改訂・改変されてもう一つの歌になったと考えられる。歌集完成までの段階で、手が加えられたのである。

そのうち、18鈴木直道は高輦の実父であり、この重複歌四首は「勝間」(正方)から『玉石集』(高輦)へ」という流れは想定できまい。直道は、嘉永四年(一八五二)一月五日に六十四歳で没しており、「勝間」成立の弘化三年(一八四六)正月頃には存命中である。正方からの料歌提供の依頼を受けて、直道が直接遣わしたか、或いは、前掲七〇三番歌に見られたように、高輦が正方に遣わした歌の中に、弟子というわけではないが、入れられていたものであろう。以下に四首全てを掲出する。

### 《事例1》

(鈴屋翁の忌日に。野月といふことをだいにて) 鈴木直道

つゆむすぶ千草の花にかけおちて月もいろある秋の、べかな野

〔勝九三二〕

(野月)

(鈴木)直通

露むすぶ千草の花にかけみえて月も色ある秋の野へかな

〔玉上秋一三八一〕

### 《事例2》

池水半氷

つるぎ羽や立へだつらむをしのすむとこの池水かたへこほれり水

鈴木直道

〔勝一三三二〕

池水半氷

つるぎ羽やたちへたつらんをしの住床のいけみつかたへ氷れり

鈴木直通

〔玉上冬一七六〇〕

### 《事例3》

雪中眺望

鈴木直道

かきくらしふる江は雪にうづもれてみるめ有けるあまのとま舟見

〔勝・一三九九〕

雪中眺望

鈴木直通

かきくらしふる江は雪にうづもれてみるめありける海人のとま

船

〔玉上冬一九五〇〕

### 《事例4》

北条泰時

鈴木直道

よのなかをよもぎが原とみるまてにおのがころのたねやまき

けん

〔勝一八二二〕

(北条泰時)

(鈴木)直通

世の中をよもぎか原と見るまてにおのかこゝろのたねやまき

ん

〔玉下雑八八六〕

《事例1》は、鈴木直道の重複歌四首の中で、唯一異同のある歌。

三句「かけおちて／かけみえて」の違い。「勝間」歌は「露」の縁語で「落ち」としたもので、「鈴屋翁の忌日」を意識した詠。恐らくこの形で正方のもとにもたらされたものを、そのまま採択したのであろう。しかし、「野月」題の歌で、露を結んでいる千草の花に光が「落ちる」はやや不自然であろう。月光(かげ)が見えるのが一般的で、「影見えて」の表現は常套的に古歌に詠まれている。『玉石集』掲載にあたって、修正されたものと思われる。

残りの《事例2》《事例4》は、同一歌。正方からすると、当時の三田尻の歌人たちを牽引していた直道、しかも正方より二十二歳年長で



松崎神社（防府天満宮）の神職である直道の歌に手を入れる発想はなかったであろう。提供された原歌のままで『勝間』に入集させている。また、高輶も父の詠を『玉石集』にそのまま掲載した。

さて、『事例1』は平仮名二字の異同で、他の三例は同一歌だった。直道の歌に関して言えば、ほとんどそのままの掲載ということになるが、むしろそのような事例の方が珍しい。【表B】に戻って、重複歌が一首の歌人（7・10・11・12・17・25・26番）は、当然「異同のある歌」か「同一歌」のいずれかにしなければならないが、異同といっても大幅に異なることが多い。

### 《事例5》

曙花

（柏木）和枝

ほのぐくと花よりしらむ曙は神もめづらむかづらさの山

〔勝四二〕

（山春曙）

（柏木）和枝

かつらさや花よりしらむ曙は神もわひしと思はさるらん

〔玉上春二九〇〕

二句・三句を除いて大幅に異なる。二句「花より白む」は『秋篠月清集』『南海漁父百首』の「初瀬山尾上の鐘の明け方に花よりしらむ横雲の空」「五〇九」が古い例と思われ、近世では『鈴屋集』などにも見られる表現。『勝間』では、満開の桜の辺りから白んで見える曙を葛城山の神が愛でると詠む。『玉石集』では、『枕草子』ほか『俊頼髓脳』『奥義抄』などの歌字書で著名な、容貌が醜くて昼間は姿を現さなかった葛城山の神（ひよりのかみ）の伝説を踏まえ、

「花より白む」曙に困惑し辛く思っているであろう心中を、「わびし」と思っていないのだろうか」と推測している。『勝間』歌のままなら葛城山である必然性がなく、『玉石集』の方が葛城山の伝説をうまく歌に取り込んでいる。『勝間』歌の結句「葛城」を『玉石集』では初句に置いて、上の句までは「葛城山」詠の伝統的な遠望の桜を詠み、下の句で伝説が入り込む詠みぶりも巧みである。

作者柏木和枝の素性がはつきりしないので、この歌がどのような経緯で両作品に入ったのかは軽々には判断できない。しかし、『玉石集』歌の方が完成度の高いことは言える。『玉石集』の形から『勝間』の形への改変は想定できず（これほどの「改悪」はあり得まい）、『勝間』の形の歌が先に存在して、それが推敲・改変の手を経て、『玉石集』の形になったと考えて間違いないだろう。

これに関連して、興味深い資料が山口県文書館にある。『類題玉石集稿本』<sup>〔註20〕</sup>と題されたもので、既に兼清正徳によって紹介されている<sup>〔註21〕</sup>。兼清に依ると当該資料は、「各地各人から送付された一首一首について高輶は自ら評語を記すと共に、歌友の近藤芳樹・弘正方・尾古重伴・今津維亮らに回覧して選歌し、〈中略〉○印・△印・・印・へ印などを付して収録の是非を定め、あるいは歌意・歌語・歌調などについて忌憚のない意見が交換され」たという。そして、例えば芳樹詠の春の部八首に関しては、最終的に二首だけが収載され、新たに十一首が加えられたという。この『類題玉石集稿本』は五人による意見交換のごく一部を記しただけの資料で、該本の中には『勝間』歌との重複歌は見られず、『事例5』の柏木和枝歌の改変・推敲の跡は不明である。ただ、『玉石集』に採歌するにあたって相当の議論がなされたことはこの『類題玉石集稿本』から

窺われる。

さらにもう一つ、興味深い資料として『玉石集料詠草』<sup>〔註2〕</sup>が挙げられる。当該資料は、近藤芳樹筆本を吉田樟堂が昭和十八年八月に筆写したもので、「コノ一綴モ余ガ芳樹翁ノ遺蔵書ノ中ニ見出テタルガ珍シキモノニ思ヒ借リテソノ全部ヲ写シタリ」とある。巻頭に、以下のように記される。

一、コノ一綴ノ詠帥ハ鈴木高柄ガ類題玉石集ヲ編輯スルニ当リ

ソノ材料ヲ勸進シタルニ

近藤芳樹 静間三積 冷泉古風 瀬能言直（ノチ正

路） 松岡経平

ノ五人ヨリ各自書キ贈リタルモノニテ表紙ニ芳樹ノ筆モテ玉石集料詠草ト題シタリ

近藤芳樹以下の五人は『勝間』歌人ではないので、ここに挙げられている歌には『勝間』入集歌はない。また、前掲『類題玉石集稿本』との中に、例えば近藤芳樹の歌など、共通するものも一部には存在するが、完全に一致しているわけでもない。

ただ、「（五人の）各自が書き記して高柄に贈った」という『玉石集料詠草』歌人の中で、例えば、最も若い瀬能言直（長州藩士。江戸勤番中に前田夏蔭らに就く。高柄より五歳年長）の和歌を見ると、『玉石集料詠草』には、春六首・夏十首・秋八首・冬七首・恋雑二十四首・追加二十九首の総計八十四首が掲載されている。『玉石集』の瀬能言直歌は全十一首。そのうち、『玉石集料詠草』との重複歌は六首である。しかし、その六首のうちで一字の改変もない「同一歌」は一首にすぎない。他の五首は何らかの改変・推敲の上で掲載されている。一例のみ挙げる。

### 《事例6》

暁

暁のとりになめさむる此春やおいてふもの、はしめならまし

〔玉石集料詠草〕

暁

暁の鳥にをりく目さむるや老てふことのしめなるらん

〔玉下三四八〕

瀬能言直

傍線部に異同があるが、ともに係助詞「や」による疑問（自問、或いは軽い疑念）の歌である。『玉石集料詠草』歌は、暁の鳥の声に目覚めることから老いを自覚したという歌意であるが、目覚めの理由は当該歌の形であれば、短夜へと向かう春という季節の特性に帰することも可能である。春に限定しており、「老いの初め」の実感にはやや曖昧さが残る。『玉石集』歌は、春に限定せず、「その都度目覚める」という「繰り返し」の要素を取り入れ、「暁に鳥の鳴き声によつて頻繁に目覚めるのが、老いの初めであろうか」と、「暁」題に適った歌となっている。

つまり、この『玉石集料詠草』の事例に依れば、高柄のもとに芳樹ら五人から提出された料歌は、『玉石集』に掲載するか否かの選別がなされただけでなく、歌そのものに手が入られた（改変・推敲された）上で掲載されたことが推測できる。瀬能の歌は、提出された八十四首のうち、一首のみが瀬能作のままに掲載され、他の五首は右に見たように改変・推敲されて掲載された。そして、七十八首は採られぬままとなったのである。

いささか横道に逸れたが、『類題玉石集稿本』『玉石集料詠草』という二つの資料から浮かび上がるのは、『玉石集』が料歌の良し悪しを選別し、厳正な検討・取捨選択を経て入集させただけでなく、結構な時間と手間暇をかけて改変・推敲したという事実である。こうした作業は、もちろん高輅が中心ではあっただろうが、『類題玉石集稿本』で兼清が紹介したように、近藤芳樹ら長州藩の和歌の重鎮たちも関与したと思われる。

本章冒頭で見た【表B】の「異同のある歌」を二例ほど見ておく。

### 《事例7》

梅初発

(今津) 維亮

なによりもうれしき物は友まちてあるじする日の梅のはつ花

〔勝一五〕

初花

(今津) 維亮

かきりなくうれしきものは友まちてあるじする日の初桜花

〔玉上春三八三〕

### 《事例8》

海辺鴈

(五十君) 夷守

まつらがたつばさしをれてくる鴈はありなれ河の音やわけ、む

〔勝九七〕

海辺雁

(五十君) 夷守

松浦かたつばさしをれてくる雁はありなれ川のきりやわけけん

〔玉上秋一二八三〕

《事例7》の『勝間』初句「なによりも」は、口語的で和歌では

珍しい表現。「この上ない」意としては『玉石集』の形が一般的。また、結句の異同は、『玉石集』の「初桜花」は古歌では多くはなものの、「行かむ人來ん人しのべ春霞たつ田の山の初桜花」〔新古今集春上八五〕など勅撰集に用例がある。かつ、かねてから友人を招いての宴席を予定していた際に、無上の喜びとするのは桜の方がふさわしい。恐らく、今津維亮は『勝間』の形で詠んだのであろう(実体験か)。それが、高輅を中心とする歌人たちによって、初句と結句を改められて、「初花」題として『玉石集』に入集したのであろう。少なくとも、『玉石集』から『勝間』への改変は想定できまい。

《事例8》は結句「音／霧」のみの異同。「ありなれ川」は『夫木和歌抄』一一一九四～五番に「未国」で載るが、『日本書紀』卷九では、新羅王が神功皇后に服従した誓詞の中で、あり得ないことの喩えとして「阿利那礼河の返りて逆に流れ」〔注23〕と記される。当該河川については、『釈日本紀』卷十一「述義七 神功」に「私記曰。師説。新羅国之河名也」〔注24〕とし、現在では、北朝鮮と中国の国境河川「鴨綠江」を想定するなど、諸説あるようだが、夷守は新羅国の河川として詠んだのであろう。「つばさ萎れて来る雁」は、定家歌「霜まよふ空にしほれし雁がねの帰るつばさに春雨ぞ降る」〔新古今集春上六三番〕などに見られ、定家歌は春の「帰る雁」だが、夷守歌は秋の雁とする。大陸の大辺りでの霧の中を雁が飛び来たつたためにつばさが萎れた、と『玉石集』では解される。単に河の音を聞いて来たとする『勝間』よりも内容に深化がある。

以上、『勝間』と『玉石集』の重複歌の中で、「異同のある歌」を見てきたが、これらの事例は、『勝間』から『玉石集』への歌の提供がなされた、「その歌を『玉石集』に入れるに際して厳選した上

で適宜改変の手が加えられた」という状況を示していよう。

## 五 『勝間』と『鴨川集』の重複歌の考察

『勝間』と『鴨川集』の重複歌を見る。

【表C】は、両集の重複歌の入集状況である。太郎集から五郎集、詠史歌集初編・二編を調査対象としている。しかし、実際に重複歌があったのは、次郎・三郎・詠史初編の三集である。

さて、前章で考察した『勝間』と『玉石集』の重複歌の状況と比べて、一目瞭然なのは、ほとんどが同一歌であるということ。重複歌十首のうち、八首が同一歌である。時系列から考えても、『勝間』が正方と同郷の歌人詠ばかりである点、ならびに出版を企図しなかった点から考えても、『勝間』から『鴨川集』への料歌提供であり、その逆はあり得まい。恐らくは鈴木高輅を介して、「弘正方から高輅、そして長澤伴雄へ」と歌の融通がなされたのであろう。ただし、一部の歌（特に正方自詠）は正方から伴雄に直接遣わされた可能性もある。それは、次の『絡石の落葉』（伴雄の歌集）五二二番歌<sup>〔註〕</sup>からの推測である。

### 【表C】『勝間』と『鴨川集』の歌人別重複歌入集状況

注：歌番号は『勝間』の歌番号を挙げて（ ）内に『鴨川集』の太郎集～詠史歌集を略記

	氏名	重複歌数	異同のある歌番号	同一歌の歌番号
1	弘正方	1首	144 (※冬)	
3	鈴木高輅	4首	30 (※春)	36 (※春), 147 (※恋), 152 (◎恋)
4	五十君夷守	4首		4 (※春), 145 (◎冬), 158 (◎恋), 181 (史◎)
6	尾古重伴	1首	175 (史◎)	
	計	10首	2首	8首

長門の祝嶋に生る大なる蓬を杖に製りたるを其国の祓人弘  
 正方<sup>〔註〕</sup>かはるくおくりておこせけるかいと珍らしけれ  
 は、一位の殿に奉るとてけふ御殿にもてまゐりて、それに  
 添て奉れる

長門なるいはひのしまの蓬杖君につかれむ千代を経な、む

嘉永二年

蓬の杖（蓬萊杖）は現在の上関町祝嶋の特産で、一年で一メートル以上に成長する蓬を杖にしたもの<sup>〔註〕</sup>。天保の改革に関連して長州藩がまとめた地誌『防長風土注進案』の上関宰判「岩見島（現在の祝島）」にも「此地山野ニ艾草を生し、其幹一年立といへとも長大にして杖となすへし、甚雅なり、これをつく時は寿を増といふ、因て蓬萊杖と名つけ申候」<sup>〔註〕</sup>と書かれる。右の歌の詞書傍線部に「かはるがはる贈りて越せける」とあるので、嘉永二（一八四九）年までに、正方は伴雄に数年にわたって蓬萊杖を送っていたのである。前掲【表A】に依れば、正方は次郎集から採歌されるようになり、次郎集六首のうち、一首が『勝間』と同一歌（【表C】参照）である。次郎集は賀茂直兄序の日付（嘉永三年二月）が初発の目安とされるが、それ以前から正方が伴雄に蓬萊杖（もちろん、他に金品も）を贈る関係にあった。その際に、自詠を贈った可能性は決して低くはあるまい。

なお、三章で【表A】を概観した際に、5井上直道が『勝間』入集歌数が上位なのに、『玉石集』に一首も採られず、『鴨川集』四郎集に一首採られたことの説明を保留した。注8の別稿で井上直道の

略歴を考察したが、直道は長州藩士でしかも弘正方と同じく江戸勤番の経験があり、無給通という正方と同じ立場である可能性も高い。かつ、【表A】の29には「井上直道本生母」なる歌人の歌が一首見られる。恐らく、正方と昵懇の関係が想定でき、そうしたことから、高輅を介さずに正方が伴雄に歌を送った際に井上直道の歌も添えた可能性もあるう。

その弘正方唯一の、『勝間』『鴨川集』重複歌（かつ、同一歌）は以下の通り。

《事例9》

雪のあした人のもとへ

（弘） 正方

たれかはおもひたえたる山ざとの雪こそ人にみせまほしけれ

〔勝一四四〕

（山家雪）

（弘） 正方

たれかはおもひたえたる山ざとの雪こそ人にみせまほしけれ

〔鴨冬12才〕

歌題を類題集にふさわしく改めて他の歌と揃えた以外は完全に一致している。

『勝間』『鴨川集』重複歌は、このような「同一歌」であることが通例であり、この点は、『玉石集』と大きく異なる。「異同のある歌」二首を見ておく。

《事例10》

春雨

（鈴木） 高輅

うちかすむにはのくれ竹おのづからたわむに春の雨をしるかな

〔勝三〇〕

（春雨）

鈴木高輅

打かすむ園のくれ竹おのづからたわむに春の雨をしるかな

〔鴨春11才〕

《事例11》

鎌足公

尾古重伴

よのさまをみしまのあしのはがくれてもえ出ぬべきふしやまち

けん

〔勝一七五〕

（大織冠鎌足大連）

尾古重伴

よのさまをみしまの芦の葉かくれてもえ出ぬへきときやまちけん

ん

〔鴨史一上30才〕

《事例10》は、二句が「には／園」で異なる。「庭の呉竹」も「園の呉竹」もともに用例は多く歌意は通じる。異同が生じた理由は不明である。

《事例11》は、結句が「ふし／とき」で異なる。作者の尾古重伴は、鈴木高輅より二歳年下の文化十一年（一八一四）生まれ。本来は鈴木姓。松崎神社（現防府天満宮）の社家であった尾古家に入り、高輅の父直道に就いて和歌・国学を学んでいる。このような経歴に鑑みると、《事例11》の歌は、尾古から正方に伝えられたか、或いは尾古から高輅を介して正方に伝えられて『勝間』に入集したのである。その一方で、高輅から長澤に伝えられて『鴨川集』に入ったと考えられる。当初、尾古が詠んだのは、『勝間』の形「もえ出ぬべき節や待ちけん」だったのである。この歌は、『日本書紀』な

どが記す、撰津国三島の別邸で雌伏し策を練った鎌足の事蹟を詠んだもの。「よ（節）・蘆（節）」という縁語で歌を統一したのである。しかし、大化の改新の功臣で藤原氏の祖である鎌足が、萌え出でぬべき「節（きっかけ、機会）」を待つというのでは「節」に重みがない。大織冠鎌足が「時に会ふ、時めく」意として、あえて常套的な縁語「節」を用いずに「時」に改めた。恐らく尾古や高柄ほかの議論があつての改変であらうが、それが長澤のもとに送られ、そのまま入集したのではなからうか。

加えて、重要な事実がある。この歌は、『玉石集』にも入集している。かつ『事例11』の異同部分が更に異なる。

#### 鎌足大臣

よのさまをみしまの芦の葉かくれてもえ出ぬべき春やまちけん

（尾古）重伴

〔玉下雑八五二〕

「節／時／春」という、三つの異同である。雌伏して時を待つ状態は、まさに厳冬期に春を待つのに近い。古来「葦牙」と呼ばれてきた葦の新芽。それが角ぐむのを待つように、鎌足が雄飛の時を待ったのである。それを踏まえての改作が『玉石集』であらう。とともに、当該箇所が『玉石集』関係者（歌の検討者）たちの間で議論のあつたことを窺わせる。

この事例は、『玉石集』の形から『勝間』の形への変更を想定するのは難しいことを示すし、先に見たように『玉石集』が歌の検討・推敲を経て完成したことをも物語っている。

最後に、特殊な事例を一つ見ておく。

#### 《事例12》

花のうたの中に

（鈴木高柄）

うかれきてむつる、蝶の羽風にもちりやすげなるはなのいろかな

な

（花）

鈴木高柄

うかれきてむつる、蝶の羽風にも散やすげなる花の上かな

〔鴨◎春14ウ〕

結句に「いろ／上」の異同がある。しかし、次郎集の形は無理であらう。散りやすげなるのは「花の上」ではなく「花の色」である。四郎集末尾に「鴨河集正誤」が掲載されており、その中に「結句花のうへかなは花のいろかな也」と訂正する。「勝間」歌と同一歌である。とともに、当初「勝間」歌の形で高柄から伴雄のもとに送られたにもかかわらず、誤刻したため、高柄から連絡が行き訂正となつた経緯を推測させる。

以上、「勝間」と『鴨川集』の重複歌を見たが、重複歌十首のうち、八首が同一歌で、異同のある歌二首についても、ともに漢字一字（庭／園、節／時）相当の違いだけであった。書簡等による資料の裏付けはできないが、各歌を比較検討した結果から考えて、『勝間』収載の形の歌が『鴨川集』の撰集資料となつたことは明らかである。弘正方から長澤伴雄に『勝間』歌が提供された経緯は未詳である。鈴木高柄が仲介したかもしれないし、先の『絡石の落葉』所収の蓬萊杖の歌（の詞書）からして、正方から直接伴雄にもたらされた可能性もある。

いずれにせよ、その料歌に改変も推敲も極力施さず、選別のみをして掲載したのが『鴨川集』なのである。ここに、撰集資料（料歌）に対する、『玉石集』との大きな姿勢の違いを看取できよう。

## 六 おわりに

『勝間』は、周防国三田尻という一地方に限定した同時代歌人詠による類題集で、上梓もされず、写本だけが現存する小作品である。同時代人の日記・書簡類にも登場せず、唯一、『玉石集』下巻の七〇三番歌（四章冒頭参照）詞書によって、書名が知られた作品であった。その概要は旧稿で纏めたが、本稿では、『勝間』と『玉石集』・『鴨川集』との重複歌を考察することによって、『勝間』が撰集資料として使われた可能性とその特質を考察した。また、各歌を具体的に比較検討することによって、『玉石集』と『鴨川集』の撰集資料に対する扱い（姿勢）の違いも浮き彫りとなった。その結果、判明したことは、以下の通りである。

第一に、『勝間』と『玉石集』との関係である。鈴木高輅やその父直道の歌などは、高輅から弘正方に提供されて、『勝間』に採られたと思われる。それ以外の歌人詠に関しても、『勝間』が三田尻という狭い地域の当代歌人中心の類題集である以上、歌人本人から正方に託された歌も多かったであろう。とはいえ、『勝間』から『玉石集』へと提供された歌も想定できた。両歌集間で異同の激しかった歌である。それらに関しては、『勝間』掲載の形よりも、『玉石集』掲載歌の方が推敲・洗練されたものが多く、高輅一人の手ではなく、近藤芳樹など当時の藩内主要歌人らによって検討がなされ、改変し

た上で『玉石集』に採られたのであろう。

三章冒頭で見たように、『玉石集』は、その計画立案から実際の上梓までにかかなりの時間を要している<sup>〔註28〕</sup>。嘉永元年八月二十四日付鈴木高輅宛萩原広道書簡には、「玉石集廣足の方よりも集め候を進じ候由二而、又々御校合など御手（間）取候よし、御辛勞奉愚察候、何分二も少しも早く御上梓之方、可然と奉存候」<sup>〔註29〕</sup>とあり、この「校合」は、現代の「校正」の意も持ちつつ、歌本文の推敲と秀歌への改作も言ったものであろう。四章で見た『類題玉石集稿本』『玉石集料詠草』から窺われるように、『玉石集』は気の遠くなるような推敲の時間と手間暇をかけて完成した。他の類題集を粗製乱造と言ったら身も蓋もないが、当時の類題集編集競争（狂騒）の中にあつては、高輅らの、歌人（撰者）としての矜持とよりよい類題集の完成を目指す姿勢とは、記憶に留められてよからう。

しかし、全国規模での当代歌人詠（歌人も編者も存命中）の類題集編集において、歌人から提供された歌を改変して掲載すれば、大きな問題となることは容易に想像がつく。

『玉石集』刊記日付の翌年の上梓である仲田顕忠編『類題武蔵野集』（初編、嘉永五年刊）が、小林歌城の歌を無断で改変して両者の対立を招いたことを、中澤伸弘が詳細に考察している<sup>〔註30〕</sup>。『玉石集』に関しても、高輅は前田夏蔭や加納諸平の歌に手を入れようとし、それを萩原広道から、「夏蔭、諸平ハ有名家故、此位の事ハ御捨置候ても宜しと奉存候、改め候へハ、殊外やかましく申候よしも、承候事二御坐候」<sup>〔註31〕</sup>とたしなめられている。また、『玉石集』上梓後、『類題青藍集』の編者で知られる秋本安民（姫路藩士）が自詠を無断で改作された不満を広道に伝えたようので、広道から高輅

に「安民が哥何やら御直しニ成候とて何とか申こし候、其哥ふと思  
出不申候、御吟味可被成候、何分毎々申上候通、哥ハ御直しなく御  
入可被成様、奉祈候、此一挙流行不流行のさかひと相成可申、呉々  
も乍失敬申上置候」<sup>〔注2〕</sup>と、懇願にも近い書簡が届いている。

いずれにせよ、書簡類に記されていた『玉石集』推敲の事実が、  
『勝間』歌との比較検討で浮かび上がったのである。

そして、第二に、『勝間』と『鴨川集』との関係も見えてきた。  
弘正方から長澤伴雄に『勝間』（ないしはその所収歌を一纏まりに  
した料歌資料）がもたらされた可能性もあるし、間に鈴木高輅が  
入った可能性もある。とにかく確実なことは、『玉石集』とは異なっ  
て『鴨川集』は、歌の推敲・訂正・改変をほとんど施さずに、『勝間』  
掲載歌のままの形で採歌したという事実である。

五章末で見た《事例12》は『鴨川集』で生じた誤刻を四郎集末尾  
の「鴨河集正誤」で訂正した事例であった。正誤表の付載は歌人と  
しての真摯な姿の現れであろうが、類題集編集競争（狂騒）の世に  
在って、編者として生き残るためには、送られてきた歌を極力原歌  
のままに掲載し、正誤表付載の煩も厭わない姿勢も必要であったの  
かもしれない。

## 〔注〕

注1 紀州藩内の政争に基因して、伴雄が諸平に毒を盛る事件（毒  
殺は未遂、ただし諸平は以後長期間不調）を起こしたとされ  
てきたが、再考を促す見解もある。

注2 以下、『鴨川集』本文の引用は左記の影印に依る。判読しづ  
らい箇所は、国文学研究資料館の新日本古典籍総合データ

ベース掲載「山口大学図書館棲息堂文庫本」「東京都立中央  
図書館本（東京誌料）」等を参照した。

朝倉治彦監修『類題和歌鯁玉・鴨川集 四〇六』（クレス出版、  
平成18年4月）。

注3 『萩原広道消息』（井上通泰編、私家版、刊行年不明）掲載の  
第三書簡。嘉永三年（一八五〇）十一月二十五日付書簡。

注4

『萩原広道消息』（井上通泰編、私家版、刊行年不明）掲載の  
第四書簡。この書簡は、該本の十九丁表に「嘉永三年<sup>（マウ）</sup>正  
月廿三日」として翻字されるが、左記の森川彰によって嘉永  
四年（一八五二）正月廿三日付である旨が考証され、梅溪昇  
によっても首肯されている（本稿末〔付記二〕参照）。なお、  
注3の第三書簡の年次も森川によって訂正されており、本稿  
は訂正後の年次を用いた。

森川彰『萩原広道消息』について（混沌会『混沌』十二号、  
昭和63年10月）

注5

梅溪昇『洪庵・適塾の研究』（思文閣出版、平成5年3月、  
三二〇～三四八頁）

山崎勝昭『萩原広道上／下』（ユニウス、平成28年3月、下  
の五八三～五八六頁）

注6

『近藤芳樹日記』の天保十三年（一八四二）五月から名前が  
見える。同年十二月五日の条には、「芳風が輯んといふ類題  
同調集の催しぶミをもそへつ。その詞にはく、此度おのれ  
おもひたちて、東ハミちのくのはてを極め、西ハつくしの海  
をかぎり、広く天の下の作者たちにこひもとめて、この頃の  
しらべにかなへる言の葉どもをあつめ、年の号にあふ天とと



もに長くたまたしめて、治れる代の風雅をほこらんとす。志お八さん人二八玉を櫛笥のそこにかくし給ふことなかれとぞ」とある。長井芳風（長春）の名は、当時の和歌の記録や類題集姓名録には見当たらない。夫婦で五月に西市から萩に出府して旬日滞在したり、芳樹に扇合わせの判をさせたりしており、西市の富裕層と思われる（芳樹門か）。名を残すためであろうが、無名の歌人が、全国規模での類題集編集を志した実例としては興味深い。なお、『近藤芳樹日記』は、久保田啓一・蔵本朋依「山口県文書館蔵『近藤芳樹日記』翻刻（六）」（広島大学大学院文学研究科内海文化研究施設『内海文化研究紀要』三九号、平成23年3月）に依る。

注7

小野美典「弘正方編『勝間の若菜』について―近世後期周防国三田尻の歌人詠の類題和歌集」（日本大学法学部『桜文論叢』一〇三巻、令和3年2月）

注8

小野美典「弘正方編『勝間の若菜』歌人略歴稿―近世後期周防国三田尻の歌人たち」（日本大学法学部『桜文論叢』一〇六巻、令和4年2月刊行予定）

注9

兼清正徳の研究は左記を参照。

①『防府史料』第20／21集『類題玉石集』（防府市教育委員会発行、昭和47／48年10／8月）（兼清の担当で翻刻、巻末に兼清作成の氏名録・索引を付す）

②兼清正徳『類題玉石集』編輯の意図と成果（上／中／下）『芸林』二十四巻二／三／四号、昭和48年4／6／8月

注10

注5の『萩原広道下』に詳しい（特に五六六―五八三頁）。

注11

亀井森「近世後期類題和歌集編纂の一齣」（近世文学会『近

世文藝』九十号、平成21年7月）

注12

内田誠一ほか「近世から近代にかけての短冊の諸相―文事・蒐集・影印の周辺」（『日本習字教育財団学術研究助成成果論文集』四号、平成30年3月）所収の第一章の三「近世末期国学者の短冊をめぐる文事（一）―類題和歌集の編纂と短冊」（吉良史明）

注13

山本嘉将『加納諸平の研究』（初音書房、昭和36年11月）

注14

一章で触れた加納諸平毒殺未遂事件を詳細に追ったのも、注13の山本であったが、注5の山崎勝昭「萩原広道」（上巻七二四―七二七頁、下巻三四二―三四四頁）や次掲の注15の亀井森①らによつて、再考ないしは別角度からの考察がなされている。

注15

亀井森の論考は注11のほか左記などを参照。

①「長沢伴雄の苦悩―加納諸平毒殺未遂事件前後」（青山学院大学『青山語文』三八号、平成20年3月）

②「絵巻はなぜ模写されたのか―国学者長沢伴雄の『春日権現験記』模写一件」（『文献探究の会』『文献探究』四六、平成20年3月）

③「紀州藩蔵書形成の一側面―伴信友と長沢伴雄」（勉誠出版『アジア遊学』一五五、もう一つの古典知』平成24年7月）

④「伴信友『史籍年表』刊行前夜―近世後期年表編纂の一齣」（『鈴屋学会』『鈴屋学会報』三六号、令和元年12月）

注16

『詠史歌集 二編上／下』（帯伊書店、大正二年四月）の上巻の六郎のはしがきに、以下のように記し、安政二年（一八五五）には、稿が成っていたことがわかる。『詠史歌集』その

ものは類題集とは言えないが、編者長澤自身が「鴨河集附録 詠史歌上／下」と巻首題に記しており、『鴨川集』の一つと意識していたことがわかる。

この書はおのが父長澤伴雄翁の編輯にして嘉永六年に初編を発行し世に流布せらるもの、第二編なり翁は安政二年公のかしこまりにて幽囚の身となれるが当時すでに脱稿したるをもてをりふし来寓せりし石見の人金子杜駿に淨写せしめ梓に上さむとしつ、遂に果さざりしを（後略）

注23 坂本太郎ほか『日本書紀 上』（岩波書店、昭和42年3月）

の「神功皇后摂政前紀」の三三八頁、

注24 『国史大系 卷七』（経済雑誌社、明治31年7月、六六〇頁）

注25 本文は左記に依る。

亀井森主編『臺灣大學典藏全文刊本1』長澤伴雄歌文集

絡石の落葉 二卷（國立臺灣大學圖書館、平成20年7月）

注26 上関町史編纂委員会編『上関町史』（上関町、昭和63年3月）

の四一頁に解説があり、巻頭に現物のカラー写真が掲載される。

注17 『勝間』本文は、山口県文書館蔵吉田樟堂文庫本（請求記号・

吉田樟堂一二七六）に依る。本文左傍の振り漢字を活字化の

都合で右傍に置き換えた以外は、漢字・仮名・句点・濁点も

底本のままで翻字。『玉石集』本文は、注9の①の翻刻に依

る。なお、上巻（20集）と下巻（21集）で歌番号が個別に一

から始まるので要注意（原典のままの歌番号。上下の区別を

付した。『鴨川集』本文は注2を参照。引用した歌には、ク

レス出版の影印に記された部立と丁数を併記した。

注18 『鴨川集』各集の成立に関しては、注2の解説に多くを依拠

した。また、朝倉治彦『資料』類題和歌鴨川集（近世後期

類題歌集調査六）（『四日市大学論集』一八巻二号、平成18

年3月）も参照。

注19 注5の『萩原広道下』の五七六頁。

注20 山口県文書館所蔵、請求番号「一般郷土史料五一八」。

注21 注9の②『芸林』論文の上。

注22 山口県文書館所蔵、請求番号「吉田樟堂二一八」。

注27 山口県文書館編修『防長風土注進案』一〜二十二（山口県立

山口図書館発行、昭和35〜41年）の六巻「上関宰判下」の四

三四頁

注28 山崎勝昭が注10でその実情を詳細に追っている。

注29 一日会編『櫻井武次郎先生還暦記念 萩原廣道書簡』（中尾

松泉堂書店、平成12年3月、一七九〜二八〇頁）

注30 中澤伸弘「近世後期歌人小林歌城と仲田顯忠」（『国学院雑誌』

一〇三巻八号、平成14年8月）

注31 関西大学図書館手紙を読む会「関西大学所蔵 萩原広道の消

息（その三）」（関西大学図書館「関西大学図書館フォーラム」

八号、平成15年6月）の第十一消息（嘉永四年四月十日付鈴木

注32 木高鞆宛萩原広道書簡）。

注29の二一八頁。嘉永五年十月十七日付鈴木高鞆宛萩原広道

書簡。

〈付記一〉

本稿を成すにあたり、資料の閲覧・写真撮影に際して山口県文書館に便宜を賜わった。衷心より御礼申し上げます。

〈付記二〉

注4で取り上げた『萩原広道消息』（井上通泰編、私家版、刊行年不明）の第四書簡に注7の旧稿の注3でも触れた。その際、「この書簡は、該本の十九丁オに「嘉永三年<sup>（マツ）</sup>正月廿三日」として翻字。山崎勝昭は、当該書簡を嘉永四年正月のものとして注4（小野注・山崎勝昭『萩原広道 上・下』（ユニウス、平成28年3月、下巻の五八七頁）の立論で使用。山崎は「広道書簡の年次」（『葎』十七号、平成20年4月）で、先行研究における萩原書簡の年次の誤りを訂正するが、当該書簡に関しては嘉永三年から四年への変更理由に「触れていない」と注記した。

稿者は、井上通泰の嘉永三年？説の当否の判断がつかかねて、このような記述をしたが、拙稿をお読み下さった山崎勝昭氏より懇切丁寧なご芳書を頂戴した。その中で、注4に掲出した森川彰氏・梅溪昇氏のご研究をご紹介いただいた。井上通泰が誤っており、当該書簡が嘉永四年のものであることは既に共通認識とみなしてよいようである。山崎氏には、稿者の調査不足をお詫び申し上げますとともに、ご学恩に感謝申し上げます。

（おの・よしのり）